

「御国が来ますように！！ 自分との闘い ころの思い」

マルコ6:1～29

■ あなたはどちらを選ぶのか

今回の聖書箇所、イエスさまは郷里に帰っています。イエスさまは郷里では「大工の息子じゃないか」「結婚前にできた子どもじゃないか」と見下されていました。ルカの福音書では一人で帰郷した際、嫌がられて崖から落とされそうにもなっています。家族でさえも恥ずかしそうに振舞うことがありました。しかし、イエスさまは自分の生きざまを通して、最終的には聖書にも記されているように、これだけ反発の大きかったナザレにまでも良い影響をもたらされました。生き方はとても大切です。自分との闘い、自分はどこに向かうのか…。イエスさまは向かいたくない郷里に向かって進みました。この「郷里」には、創世記 1:1「初めに、神が天と地を創造した」の「地」の意味があります。「郷里」と書かれていますが、実は「天と地の違い」が示されています。イエスさまは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができずには考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、自分にとって行きたくないところに行かれたのです。しかし、私たちは自分にとって行きたくないところ、嫌なことから逃げてしまいます。本当は逃げてはいけません。イエスさまは逃げずに嫌なところへ向かいました。その彼の強い信念が、一番彼を受け入れていなかった者たちにまで伝わったのです。ですから私たちも、どうして彼が十字架の死にまで従うことができたのか、そして、自分たちが今、どう生きるべきなのかを学ばなければなりません。

■ 考えるということ

「42」という映画があります。史上初の黒人メジャーリーガーとなったジャッキー・ロビンソンの半生を、ブルックリン・ドジャース（現ロサンゼルス・ドジャース）のジェネラル・マネージャー（GM）ブランチ・リッキーとの交流を軸に描いたドラマです。1947年、南北戦争以降、未だに人種差別が色濃く残るアメリカで、ブルックリン・ドジャースのGMだったリッキーは周囲の反対を押し切り、ロビンソンとメジャー契約を結びました。2人はファンやマスコミ、チームメイトからも誹謗中傷を浴びせられるのですが、それに負けることなく自制心を貫き通し、ひたすら冷静にプレーに徹するロビンソンの姿勢に、次第に周囲の人々の心もひとつになっていくというストーリーです。この2人の生き様は間違いなくアメリカを変えました。タイトルの「42」とはロビンソンが付けていた背番号で、現在アメリカ・カナダの全ての野球チーム（メジャーはもとより、マイナーリーグ、独立リーグ、アマチュア野球に至るまで）で永久欠番となっている。なぜならば、彼のような生き方ができる人がいないからです。今回の聖書箇所、イエスさまは、どんな気持ちで自分の人生に向き合ったのでしょうか。イエスさまの生き様の最後は十字架刑での死でした。裸で自分を覆うものは何もない屈辱だったと思います。しかしイエスさまはそれをやり切ったのです。その結果、一番近くにいて一番受け入れられることが難しかった人々が彼を尊敬したのです。それはとても難しいことですが、これが私たちの生き方であるべきです。

■ マルコによる福音書6章1節～29節

先ほど紹介した映画の中でリッキーは自分たちに罵声を浴びせ罵った人々に対して「フィラデルフィア（友情愛）」を示しました。「彼らは、自分たちのために貢献してくれた」というのです。自分たちに悪を働く人に対して、このような見方ができるのでしょうか。さらに彼は「紙幣の印刷は白でも黒でもない。緑だ。緑は平和の象徴だ」と言います。どんなことがあっても不変な色。クリスマスツリーでも緑には意味がありました。しかし、私たちはその意味が分からず感情的になってしまいます。自分に負けて逃げてはいけないものから逃げてしまうのです。ロビンソンは、何度も自分の弱さに負けそうになりました。そんな時リッキーをはじめ多くの仲間が彼を助けてくれました。同様に、私たちもこの世にあって必ず患難に遭います。しかし、神さまは決して私たちを一人にしません。「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わた

しはすでに世に勝ったのです（ヨハネ 16:33）」とある通りです。患難の中で勇敢であることは難しいです。この難しきは、ただ患難に向かっていくだけではなく、自分の人生を栄光に導く勇敢さからです。映画の中でリッキーは、屈辱の中でこの勇敢さを持ち続けることができた理由を「彼（イエスさま）が40日荒野をさまよったように私たちもこの訓練に耐えなければならない」と言いました。リッキーは、イエスさまの生きざまに向かって進みました。私たちは、自分の弱さに負けたくない！と思っても負けそうになります。そんな時、どういう生き方を選びますか？嫌なことから逃げるという人生もあるでしょう。しかしイエスさまは、家族につまずかれても信念を曲げることなく前進しました。

稀代のマフィアにアル・カポネという人がいます。彼に雇われた弁護士がエドワード・ジョセフ・オヘアです。彼はマフィアの弁護士として、法の裏から手をまわすなどして刑事事件の処理を多数手がけていました。しかしオヘアは自分に子どもができた時「自分の生き様をこのまま見せて良いのだろうか」と思い、マフィアの世界から抜けようとすれば殺されるのが分かっていたのですが、我が子のために決意して、裁判でアル・カポネの悪事に対する証言を行いました。結果、アル・カポネは逮捕され、主人を裏切った報復としてオヘアは殺されました。オヘアの息子は、この父の生き様を見ました。航空学校、軍隊に入り、米軍の艦隊を命がけて守り抜いた功績が称えられ、オールド・オーチャード空港はシカゴ・オヘア国際空港と改名され、彼は名を残す者となりました。父であるエドワード・ジョセフ・オヘアが正しい決断を行うことで、息子にも影響を与え、結果、人々が称賛する人物となったのです。

■ 6章10節

私たちにも以前は問題がありました。今は神さまにすべてを委ねて、人生が変えられました。私たちは、神さまが初めに良しとされた姿に戻りたいのです。しかし、「こんなはずじゃなかった」ことが起こるのです。ダメだと分かっていることをやってしまう弱さがあります。この弱さに打ち勝つために礼拝を自分と戦い、本当の自分を取り戻そうとしているのです。一人の人の生き方が多くの人々の人生をそして世界を変えます。一人の人の決断が社会を変えます。逃げてしまったらおしまいです。レ・ミゼラブルの著者であるビクトル・ユーゴは「人は強さに欠けているのではない。意志を欠けているのだ」と言っています。自分の人生を振り返って、自分の罪を認識した人は変わることができます。私たちは、なぜ行きたくないところに行かなければならないのでしょうか。それは、自分の罪を赦してくれてその罪の身代わりとなられた方が、勇敢にこの死への道を進んだ生き様を見せたからです。だから私たちもこの型の生き様を選び、自分に勝つために決断して自分の弱さから出たいのです。

■ まとめ

神さまの計画を留めてしまうのは、悪魔でも他者でもありません。自分だけです。自分に負けるから神の計画が止まってしまうのです。役割を果たさず、生き様を見せるのではなく人を変えようとしてきました。これは間違いです。信念を貫き通した一人の人…イエスさまの生き様を通して、自分と闘って弱さを捨てる決断をしていきましょう。

（要約者：澤口 明子）

（2023年3月5日）